

聖書：使徒 25：1～12

説教題：カイザルに上訴

日時：2014年9月7日

今日の章でローマ総督がペリクスからポルキオ・フェストに代わります。この時のパウロはどんな状況にあったのでしょうか。パウロはこの時、カイザリヤにいました。エルサレムのユダヤ人たちがパウロを殺すまでは飲み食いをしないと誓い合った陰謀を察知して、千人隊長がパウロをカイザリヤまで護送しました。そしてパウロは総督ペリクスのもとに置かれていました。ペリクスはキリスト教に関心があったらしく、妻のドルシラと一緒にたびたびパウロを呼び出して話を聞きました。しかし肝心なところで「今はもう良い。おりを見て、また呼び出そう。」と言って、なすべき決断を先延ばしにしました。そうしている内に彼はポルキオ・フェストに取って代わられます。おりを見て、おりを見て、と言っていた彼に、そのおりは来なかった！私たちはここからペリクスのようにならないように、と戒められます。聞いた御言葉に応答するのを先延ばしにする人は、彼と同じ道を行きかねません。聖書は言います。「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしておかない」

一方のパウロにしてみれば、こんな総督に付き合い、ずっと牢屋の中にいたままであったことになります。パウロはフェスト着任の日まで2年間、牢につながれたままだったのです（24章27節）。まずこのことを考えたいと思います。パウロは23章11節で、主からこのような約束を受けていました。「その夜、主がパウロのそばに立って、『勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならない。』と言われた。」この後、間もなくパウロはエルサレムからカイザリヤへと運ばれました。この調子でどんどん新しい導きを与えられるかと思いきや、このカイザリヤでその動きはピタッと止まってしまった。来る日も来る日も何も起こらない日々が続く、2年間も牢につながれたままだったのです。

私たちはこのことをどう思うのでしょうか。何ともったいない話か！もっと早くパウロを牢屋から出してあげたら、世界宣教はさらに拡大したはずではないか、と思うのでしょうか。しかし私たちはここに、こういうことがあるのだ！と改めて教えられます。同じく一見無駄とも思える時間を過ごした人として思い出すのはモーセです。彼は40歳で挫折してミデヤンの地に逃れて行きますが、そこから戻って来るのは40年後の80歳の時でした。40歳から80歳までの40年間。非常にもったいない時間であったように思います。しかしそういう期間を過ごした彼が、その後で、なお豊かに用いられています。

ですから私たちが似た状況にあったとしても驚くべきではありません。私たちはともするとそうした毎日の中では、神は何をしておられるのか、神はおられるのか、おられるならなぜ何もしてくださらないのか、などと問いやすい。しかし私たちは忍耐を切らしてはなりません。あのパウロにもこういう時がありました。そのことを思うことによって、私たちも自らの心を強くしたいと思います。

そんなパウロに新しい転機が訪れます。総督がペリクスからフェストに代わります。新しいことが起こるかもしれない、とパウロは期待したことでしょう。しかし期待したのはパウロだけでなく、ユダヤ人たちもでした。フェストは州総督として着任すると3日後にさっそくエルサレムを表敬訪問します。エルサレムのユダヤ人たちにとってこの上ないチャンス到来です。彼らはパウロの件で自分たちに好意を持ってくれるように頼み、パウロをエルサレムに呼び寄せてもらいたいと懇願します。そしていつでもパウロを暗殺できるように殺し屋も待ち伏せさせます。しかし新総督フェストは、すぐには聞き入れませんでした。もし訴えることがあれば、あなたがたの有力な者たちがカイザリヤに来て告訴しなさいと答えます。ここではユダヤ人たちの思う通りには事は運びません。

フェストがカイザリヤに戻ると、翌日裁判の席に着きます。すなわちユダヤ人たちがフェストについて来て、さっそく訴えを起こしたということでしょう。彼らは多くの重い罪状を申し立てます。しかし一つも証拠立てることはできません。これまでと同じです。パウロも弁明します。8節：「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、またカイザルに対しても、何の罪も犯してはおりません。」これもこれまで見て来た通りです。ところがです。ここでフェストがとんでもないことを言い始めます。9節にありますように、彼は「あなたはエルサレムに上り、この事件について、私の前で裁判を受けることを願うか。」と。なぜエルサレムでしょう！そんなことをしたら危険に決まっています。せつかくエルサレムを脱出してカイザリヤまで来たのに、またエルサレムに戻ったら、今度こそいのちはなくなるでしょう。フェストは明らかにユダヤ人におもねっています。正義より政治的判断で動こうとしています。こうして事態はパウロの思わぬ方向に動き出します。パウロは初め、総督の交代によって良い導きを与えられることを期待したかもしれませんが。しかし2年間、待ちぼうけを食わされた末、もっと悪い状況が起こって来たのです。待つて、待つて、もっと悪いことが起こって来たのです。こういうことが信仰者の生活にはある、ということです。

そこでパウロはどのように行動したのでしょうか。パウロは述べます。10～11節：「私はカイザルの法廷に立っているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。あなたも良くご存じのとおり、私はユダヤ人にどんな悪いこともしませんでした。もし私が悪いことをして、死罪に当たることをしたのであれば、私は死をのがれようとはしません。しかし、この人たちが私を訴えていることに一つも根拠がないとすれば、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカイザルに上訴します。」パウロとしては、フェストのもとでは公正な裁判は期待できないと思ったのでしょう。エルサレムに引き戻されることだけは何としても防がなくてはならない。この大ピンチの中でパウロは最後の切り札が自分にあることに思い至ります。すなわちカイザルへの上訴権です。ローマ市民権を持つ者が、地方の裁判で不当に取り扱われて終わりとなることがないように、ローマでの裁判を要求できる特権です。これが出されれば、たとえ地方総督であってもこれを拒否できない。

私たちはこれを知る時、何だ、こんな方法があったのか、ならもっと早くにこの権利を使えば良かったのに！と思うかもしれませんが。しかしパウロにとってこれは考えてもみなかった方法だったのでしょう。後の28章19節で、パウロはこの時のことを振り返って「ユダヤ人たち

が反対したため、私はやむなくカイザルに上訴しました」と言っています。パウロとしては、カイザリヤで無罪とされて釈放され、アンテオケ教会へ行き、そこから再び遣わされて各地の伝道やフォローアップを行ないつつローマまで旅することを考えていたのではないのでしょうか。そのローマ行きがまさかこんな形になるとは少しも考えなかった。カイザルに上訴するというは囚人としてローマまで行くということです。自由人としてではなく、拘束され、様々な尊厳を奪われたみじめな者として行くということです。これまで神の国拡大のために良く働いた彼。その彼にはもっとふさわしいローマ入りの方法があっても良かったのではないかと私たちは思うかもしれません。しかしパウロにとってローマへの道を進む方法はこれしかなかった。囚人として行くしかない。しかしパウロはそれでよし、としたのです。これが主の開きたもう道ならこれを進もう、と。フェストは陪席の者たちと協議して言います。「あなたはカイザルに上訴したのだから、カイザルのもとに行きなさい。」フェストとしてはこの問題が自分の手から離れることになってホッとしたことでしょう。こうしてパウロのローマ行きは再び大きく前進することとなったのです。

私たちもパウロの牢屋の2年間のような状態に自分が今あると思うかもしれません。何のよい意味も感じられず、何のよい光も見えてこない日々の連続。しかしだからと言って主は私を見ておられるのだろうか、私を心にかけてくださっているのだろうか、はたまた主は本当に存在しておられるのだろうかなどと言ってはならない。主からの約束を頂いていたパウロがこのような中に置かれました。なおこの時も主の支配の御手の下にある時だったのです。また私たちは人々の様々な思惑や動きによって、その犠牲にされそうな日々の中にあるかもしれません。神の御手より、人の動きの方が物事のカギを握っているように見える。フェストやユダヤ人たちが状況をコントロールしているように思われる。しかしそうではないのです！そのように見える中で、実は主こそ力強い！ということを示しているのではないのでしょうか。良く見れば、人の心ではなく、主の心がなっています！人間が色々画策して動いている裏を書いて、主のご計画こそが進んでいます！人間の目から見れば、パウロにとって最悪の状況が発生しつつあった中で、パウロさえ考えてもみなかった方法で道が開かれて行きました。イザヤ書55章8～9節：「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。――主の御告げ――天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの重いよりも高い。」

ですから私たちは自分が今どんな状況にあっても、最も賢い知恵と力強い御手を持っている主を見上げて信頼し続けたいと思います。自分の思い描く通りの日々でないからと言って、望みを失ってはならない。ここに何の意味があるだろうかと思われるような日々にも主の目的と支配があります。主が良いご計画をもって導いてくださっています。ですから私たちに必要なのは「忍耐」です。イライラしたくなる中で、私たちは今日の箇所を示されている主を見上げたい。パウロが2年間、牢の中にいたことを覚えて。そして人が強く見えても、主こそが主権者であると告白し、主に従い続けたいと思います。その時、「この道を行け！」という主の道が開かれる時がやって来るはずでしょう。それは私たちが思い描いていた道と違うかもしれない。しかし主が準備し、備えてくださった道なら、最善の道です。主はそうして主の栄光を

現わすことができる道を備えてくださり、その道に歩むようにと今日も力ある主権の御手をもって私たちを導いてくださっているのです。